



Title	現代カザフスタンにおける多民族共存へのアプローチ：カザフスタン高麗人（コリョ・サラム）を事例に
Author(s)	李, 眞恵
Citation	日本中央アジア学会報, 16, 48-49
Issue Date	2020-07-31
DOI	10.14943/jacas.16.48
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88512
Type	article
File Information	JB016_011lee.pdf



[Instructions for use](#)

現代カザフスタンにおける多民族共存へのアプローチ

—— カザフスタン高麗人(コリョ・サラム)を事例に ——

李 眞恵

1991年ソ連解体によって生まれた15の民族名を冠した独立国は、それぞれの形でソ連解体後の国民統合に取り組むこととなった。中央アジア諸国の独立直後には、民族・宗教的対立の震源地として、カザフスタンに注目が集まったが、そのような当初の懸念にもかかわらず、独立時から今日まで、同国における民族間・地域間の関係は比較的安定している。カザフスタンでは「カザフ人中心主義と多民族共存主義の両立」という枠組みを通じて、平和裏に国民統合が行われている。そこでのカザフ人中心主義とは、多民族統合に向けてカザフスタン市民意識を高揚させるための核として、共通の価値として想定されているのである。

一方、「고려사람 Корё сарам」(コリョ・サラム)は旧ソ連地域におけるコリアン・ディアスポラである(コリョ・サラムは、1863年に朝鮮半島からロシア極東に移住し、1937年にスターリンにより強制移住させられ中央アジアに定着し、ソ連解体後独立した旧ソ連諸国の国籍を持つコリアン・ディアスポラ全般を指す。コリョ・サラムの「コリョ」とは漢字で表記すると、「高麗」であり、「サラム」は日本語に訳すなら、「人^{ひと}」という意味である。彼らを指す名称については、これまでの研究において複数存在している)。ソ連解体と新生主権国家の成立により、ソ連時代から形成されてきたコリョ・サラムに共通する特性は分化しつつある。つまりコリョ・サラムは、ソ連時代にはすべてソ連国籍者だったが、ソ連解体後、旧ソ連地域いずれかの国の国籍を持つことになり、各国の基幹民族中心の国民統合に対して、各国のコリョ・サラム社会は、それぞれの政策や制度に様々な対応をしながら変容している。

これまでの現代カザフスタンに関する先行研究は、旧ソ連地域研究の中では他国と比べて蓄積が少なく、その成果は政治学的研究に集中してきた。カザフスタンにおける少数民族社会に関する研究としては、民族文化の維持やアイデンティティ形成などを、歴史的祖国との関係や国際的影響などと関連させて分析した研究がいくつかあるが、少数民族社会の内実について長期的変容の中にソ連解体のインパクトを位置づけ、その動態に実証的に追った研究は行われてこなかった。その一方、これまでのコリョ・サラムに関する研究は、19世紀以来の朝鮮半島から沿海州への移住とスターリンによる中央アジアへの強制移住を軸にした民

族移動史を中心に行なわれてきた。ソ連解体以降のコリョ・サラム社会の実態や変容に重点を置く研究は不足していた。特にカザフスタンの国民統合に対してコリョ・サラム社会がどのように対応しているかについて、多角的・総合的に把握する試みは乏しいと言わざるをえない。

したがって、本発表の目的は、旧ソ連地域研究及びコリョ・サラム研究の観点から、現代カザフスタンにおけるマイノリティとしてのコリョ・サラムを対象に、ペレストロイカ期の著しい民族再生運動の高揚、ソ連解体による自治構想の挫折と民族再生運動の失速、独立後のカザフスタンの国民統合への対応の必要性といった激的な変化を経験する中で、彼らの社会統合と社会変容のダイナミズムはいかなるものであったかを明らかにすると同時に、現代カザフスタンにおける多民族共存へのアプローチを試みることである。

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)